

付加価値TOEICによる成績評価システム

鶴岡 公幸*

Value-added TOEIC Grading System

Tomoyuki TSURUOKA*

Abstract

Since April 2009, value-added TOEIC grading system has been introduced into the required English classes composing of English I, English II and English III for the first and second year students at Miyagi University. The TOEIC (Test of English for International Communication) is a very important component in the new curriculum. The TOEIC test is an inter-departmental event that is held annually for students of both campuses. TOEIC scores greatly affect the final grade for English I in the first year and English III in the second year. In particular, for the grading of English III, these TOEIC scores taken in the first year and second year are compared. If a student's score increases, the improved score is added to the original score and positively evaluated. On the other hand, if their score decreases, the lower score is deducted from the original score and negatively evaluated. Meanwhile, we need to be aware of the performance gap between high-and low-motivated students under this grading system and take care that the system is educationally appropriate so that students, teachers and other interest groups, including external evaluators, and company recruiters, find it reasonable and easy to understand. I discuss present critical issues regarding this system and propose future directions.

(Received September 30, 2010; Accepted February 4, 2011)

Key words : TOEIC, Value-added, Miyagi University

キーワード : TOEIC, 付加価値, 宮城大学

目 的

本稿は大学教育においてTOEICを有効に活用する方法としての付加価値TOEICによる成績評価システムの概要を説明し、その効果と課題を提示することにある。

背 景

本学は、平成21年4月から公立大学法人宮城大学となった際、同時にカリキュラム改正も実施され各学部（看護学部、事業構想学部、食産業学部）独自に行われていた英語教育は全学部統一カリキュラムに変更された。そしてその実施・運用を担う学内組織として共

通教育センターが設置され、各学部に所属していた英語教員は同センター所属となり学部は兼務となった。この背景には、学生数が一学年440名と比較的小規模な大学であるにもかかわらず、各学部で別々のカリキュラムに従い授業が展開されていること、学部間の交流や教育の品質管理という点で統一性に欠けていることへの反省および本学の外部評価委員会より、外国人教員の不足と外国語教育、特にオーラルコミュニケーションの重視を指摘された経緯がある。このような状況下において、平成21年4月より「オーラルコミュニケーション能力の養成」を主な目的とし、クラス人数を30名程度とする宮城大学新英語教育カリキュラムが

* E-mail : tsuruoka@myu.ac.jp

スタートした。

カリキュラムの概要

新カリキュラムの英語必修科目は、1年次前期が英語Ⅰ、後期が英語Ⅱ、2年次前期が英語Ⅲの3科目6単位で構成されている。全ての科目が日本人と英語の母語話者のクラスで編成され各担当教員が週1回計週2回のクラスである。各科目のテーマは、英語Ⅰはスピーキング、英語Ⅱはスピーチ、英語Ⅲはプレゼンテーションとなっている。また、学生の英語力の客観的基準の指標として、英語Ⅰと英語Ⅲの終了時（7月）にTOEIC受験を義務づけ成績評価の必要要件としている。特に英語Ⅲにおいて、英語Ⅰ終了時点でのTOEICスコアとの増減点を加算する付加価値（Value Added TOEIC Grading System）は成績評価の大きな特徴である。ここで言う「付加価値」とは、受講生の1年次と2年次のTOEICスコアを比較しその増減点を付加するという意味である。たとえば、英語Ⅰ終了時に受験したTOEICスコアが350点で、英語Ⅲ終了時に受験したTOEICスコアが400点であるとすれば、英語ⅢにおけるTOEICは400点に増減点である50点を加算し450点として評価する。一方、もし英語Ⅲ終了時に320点であるなら、1年前のスコアである350点から320点に下がった30点分を320点から減じて290点の評価となる。従って英語Ⅰの時点でスコアが低くても英語Ⅲの時点でスコアがアップすれば加算され、一方で1年次のスコアが高くても2年次のスコアがダウンすれば減点される。このようなTOEICの増減点を加味して評価する先行例はない。

TOEICテスト導入の背景には授業の到達度の測定に加え、客観的な英語力測定と、学生の自己学習の推進、また多くの企業・団体が英語能力を測定する客観的基準としてTOEICを採用していることから、就職活動への側面サポート（特に事業構想学部と食産業学部）という目的があった。なお、通常のクラス内では原則としてTOEICの受験対策はほとんど行っていない。共通して実施したことは、入学時の英語科目オリエンテーションの際、TOEICの概要を説明し、自己学習のためのEラーニング教材（アルクのネットアカデミー2）とTOEIC関連問題集、参考書の紹介をした程度であった。TOEIC受験準備のための学習は、あくまでも学生の自主性に委ねられており、教員は自己学習を促す役割である。

成績評価

成績評価では、英語Ⅰ～Ⅲについて以下の4項目が基準となっている。

- ①出席およびクラス参加：一人の教員のクラスを4回以上欠席した場合は不可。遅刻は2回で欠席1回とみなす。
- ②クラス内での小テスト、課題などの評価50%（各教員の評価25%×2）と期末試験50%
- ③クラス内で実施されるオーラルテスト
- ④TOEICスコア

表1：2009年入学者のTOEICスコアの推移

		2009	2008	増
看護学	受験者数	100	100	0
	平均	290	290	0
	標偏差	10	10	0
	最高	300	300	0
	最低	280	280	0
事業構想学	受験者数	100	100	0
	平均	290	290	0
	標偏差	10	10	0
	最高	300	300	0
	最低	280	280	0
食産学	受験者数	100	100	0
	平均	290	290	0
	標偏差	10	10	0
	最高	300	300	0
	最低	280	280	0
全体	受験者数	300	300	0
	平均	290	290	0
	標偏差	10	10	0
	最高	300	300	0
	最低	280	280	0

習熟度別クラス編成

英語Ⅰについては学部学科毎のクラス編成で、英語Ⅱは、英語Ⅰの終了時に受験したTOEICスコアによって、スコアの高い順番で習熟度別クラス編成とした。TOEICスコアが同じ場合は、オーラルコミュニケーションを主な目的としたクラスであるため、リスニングスコアの高い順番、それも同一の場合は、期末試験の成績で順番を決定した。英語Ⅲについては、英語Ⅱ履修期間中に実施されたスピーチテストと期末試験の成績を合計した点数でスコアの上位者からクラス分けを行った（英語ⅡではTOEICの受験はないため）。

本学2年生のTOEIC結果と考察

今年の7月10日、大和キャンパスおよび太白キャンパスにおいて一斉にカレッジTOEIC（大学生協を実施運営母体とするTOEIC団体一括受験制度の一つ）が、実施され、その結果は、表1のとおりであった。

全学部2年生の平均点は、2009年度の372から2010年度は392で20点の伸びにとどまった。但し、TOEIC運営委員会の資料¹⁾によれば、テストフォームの違いから生じうる±25点の測定誤差があるため、スコアは測定誤差を考慮した「幅」として見るということになっている。よってこの20点の差異は、想定しうる測定誤差範囲内であり、このテスト結果から英語力に伸びがあったと客観的に評価することは難しい。

また本学の英語資格による単位認定基準におけるTOEICスコアは（資料1）、英語Ⅰは600以上、英語Ⅱは730以上、英語Ⅲは860以上となっておりそれには遠く及ばず、事業構想学部の特別選抜（推薦入試）の出願基準の一つのTOEIC640と比較しても大きな開きがあることがわかる。

大学生の英語力は大学受験時をピークとし、トレーニングを受けなければ少しずつ減るとよく言われている。英語は文系、理系共に大学受験における重要科目であるが、いったん大学に入学してしまえば、英語のクラス以外で英語に接する機会は極めて少ないのが現状である。よって少なくとも平均点が下がらなかったことは、入学時の英語力を維持させる予防的機能はあったとも考えられるのである。

付加価値TOEICシステムを成績評価に入れた理由

資料1：（英語資格による単位認定）

資料1の内容は、英語資格による単位認定の基準と認定基準に関する説明と表である。

認定基準

認定単位	1単位	2単位	3単位
該当科目	英語	英語	英語
英語Ⅰ	600以上	730以上	860以上
英語Ⅱ	730以上	860以上	990以上
英語Ⅲ	860以上	990以上	1120以上
英検	2級	1級	1級

※平成21年度宮城大学履修ガイドP120、P122より抜粋

表2_1：学部別・習熟度別TOEICスコア(平均点)の推移

学部	レベル別	09TOEIC	10TOEIC	スコアの増減	Value-added TOEIC
看護	Class 1	381	407	26	433
	Class 2	344	350	6	359
	Class 3	314	324	10	334
事業構想	Class 1	497	540	43	573
	Class 2	447	470	23	494
	Class 3	414	446	32	478
	Class 4	370	389	19	407
	Class 5	327	351	24	363
	Class 6	328	318	-10	307
食産業	Class 7	292	347	56	403
	Class 1	429	461	32	493
	Class 2	390	398	8	407
	Class 3	342	361	19	381
Class 4	298	308	9	316	

表2_2：学部別・習熟度別TOEICスコア(中央値)の推移

学部	レベル別	09TOEIC	10TOEIC	スコアの増	伸び幅
看護	Class 1	381	407	26	433
	Class 2	344	350	6	359
	Class 3	314	324	10	334
事業構想	Class 1	497	540	43	573
	Class 2	447	470	23	494
	Class 3	414	446	32	478
	Class 4	370	389	19	407
	Class 5	327	351	24	363
	Class 6	328	318	-10	307
食産業	Class 7	292	347	56	403
	Class 1	429	461	32	493
	Class 2	390	398	8	407
	Class 3	342	361	19	381
Class 4	298	308	9	316	

は、入学時の英語力に著しい格差（700～200くらいの幅）があり、単純にTOEICのスコアだけで評価をすると、入学時で高かった学生は油断し、低かった学生は諦めてしまうことを未然に防ぐことにあった。それぞれの異なった自分のレベルにおいて努力をすればそれは成績評価の一部に認められ、怠ればマイナスに跳ね返ってくるので、自己学習を促す効果を期待していた。

では次に学部別、習熟度別のクラス毎にスコアの伸びを見てみよう。表2-1の平均値および表2-2の中央値で示すとおり、各学部とも、Class 1のスコアの伸びが高いことがわかる。Class 1には、英語に対するモチベーションの高い学生が多く、彼らにとってこの評価システムはプラスに作用したことが推察できる。一方、学生数も多くレベル差も大きい事業構想学部のClass 7のスコアの伸びは高いが、このクラスは出席数の不足等の理由で英語Ⅱが不可であった学生が多く含まれており、英語力は元来あった学生も含まれていた

表3：学部別・習熟度別スコアの増減（学生数）

学部	レベル別	伸び↑ 学数	下↓ 学数	スコア アップ の最大	最大値	平均値	平均値	中央値	中央値
看護	○	24	23	23	24	24	24	24	24
	△	23	23	23	23	23	23	23	23
	×	23	23	23	23	23	23	23	23
事業構想	○	23	23	23	23	23	23	23	23
	△	23	23	23	23	23	23	23	23
	×	23	23	23	23	23	23	23	23
	○	23	23	23	23	23	23	23	23
	△	23	23	23	23	23	23	23	23
	×	23	23	23	23	23	23	23	23
食	○	23	23	23	23	23	23	23	23
	△	23	23	23	23	23	23	23	23
	×	23	23	23	23	23	23	23	23
	○	23	23	23	23	23	23	23	23
全体		23	23	23	23	23	23	23	23

ことが原因と思われる。Class 6は、学年全体の中で唯一前年度のスコアを下回っており（-10）、モチベーションが昨年度よりも下がったことが推測される。このクラスは表3で示すとおり、学年の中でもっとも昨年度よりもスコアが下がった学生数（16名）が多い。

スコアが低い学生ほど勉強時間が増えれば高い学生よりもスコアアップがしやすいと考えられるが、この結果からは、学力別クラス編成が、下位クラスの学生の学習意欲、プライドを損なう結果を招き、自己学習に繋がらなかったことが推定される。なお英語力上位者で構成されるクラスのほうが、中位者、下位者で構成されたクラスよりもスコアの伸びが高いという同様の結果が、G-TELP²⁾を活用した鹿児島大学の例³⁾でも伺うことができる。

以上のスコア結果から次のことが明らかになった。

1. 付加価値TOEICシステムは、能力別クラス編成において上位クラス（基礎学力が高い、高得点を目指すモチベーションの高い学生が多いと想定される）の学生には効果がある。
2. 下位クラスの学生（基礎学力不足、あるいは、成績評価には無関心あるいは諦め感があり、単位取得以上の目的意識を持たない学生が多いと想定される）には、ほとんど効果がみられない。
3. 継続的なトレーニングを実施しないとTOEICスコアの伸びは期待できない。

では次にTOEICスコアが英語Ⅲの最終成績にどのくらいの影響を及ぼしたのかを見てみよう。表4で示すとおり、全学年の約四分の一に当たる111名の学生が、TOEICスコアが下がったことが原因で、最終成績

が下がった。このことは、1年時から2年時にかけて、TOEICスコアが平均では100点は伸びることを期待していた成績評価システムの設計がうまく機能しなかったことを意味する。特に看護学部では、TOEICスコアが原因で最終成績が下がった学生が42名で半数近かったことがわかった（看護学部の編入生はTOEIC受験義務がなく、TOEIC以外の成績基準によって評価）。これはおそらく、自己学習においてTOEIC受験の準備をする動機付けができなかったことが要因として考えられるので、来年度以降の課題である。

今後の方針と課題

今後の方針としては、1年生（平成22年度入学者）の英語Ⅱにおけるレベル別クラス編成は、トップクラス、つまり各学部の1クラスのみ編成するように変更した。他のクラスは、学力が均等になるように振り分けた。これは高得点学生のモチベーション、プライド、自信を向上・維持しながら、それ以外の学生のモチベーション低下、自信の喪失を防ぐことを目的としている。具体的な方策としてクラス1では、他のクラスよりも難易度を高める、課題を多く出す、進捗を早めることが考えられ、他のクラスとはある程度異なったクラス内容の授業を私は既に一部で実施している。

現状のカリキュラム上の課題としては、TOEICスコアに英語Ⅰと英語Ⅲの最終成績が左右される傾向が強いことが挙げられる。TOEIC対策をクラスの中で本格的に実施することは英語教員の中でも異論があり難しい。しかし、少なくとも学生の自己学習のきっかけとなるくらいの工夫はクラス内でも必要であろう。具体

表4：学部別・習熟度別成績への影響度

学部	レベル別	最終評価 f + i 学点 数	最終評価 f + i 学点 数	両者との 評価× 学点 数
看護	○A→XXS	2C	C	2C
	○A→XXS	2C	2	C
	○A→XXS	2C	2	2U
	○A→XXS	2C	2	2U
事業構想	○A→XXS	2	2	2C
	○A→XXS	U	U	2U
	○A→XXS	U	2	2C
	○A→XXS	2C	2	2U
	○A→XXS	2C	U	U
	○A→XXS	2	2C	2U
食	○A→XXS	U	2	2C
	○A→XXS	U	U	2C
	○A→XXS	2	2U	2C
	○A→XXS	C	C	2C
全体		2C2C	2C2	2C2C

的には以下の方策が考えられる。

第一に英語Ⅱの終了時にもTOEIC受験を義務づけることが望ましい。予算的な制約があり最初の2年間は実施できなかったが、カリキュラム全体の統一性と1年に1回のみの受験による学習の間延び感を解消し継続的な学習への動機付けとしたい。

第二に平常のクラスにおいても、オーラルコミュニケーションの養成という趣旨と反しない形でTOEIC学習の要素を授業時間の3割程度取り入れることを提案したい。例えばTOEICのリスニングセクションの中でもパート2の応答問題やパート3の会話問題は、オーラルコミュニケーションの基礎練習となるはずである。一方、リーディング対策を授業時間内でカバーすることは不可能なので、公式問題集などを活用した課題提出や小テストで補うことが考えられるし、既に先学期から実践している教員もいる。TOEICは、金融、製造、労務管理といった個別のビジネス知識を問う内容ではないが、請求書、顧客アンケート、パーティーへの招待状の理解を問うようなビジネスシーンの中の設問が多く出題される。例えばreimbursement, complimentary, eligibleのような学校英語ではあまり馴染みのない単語も頻出なので、自己学習でフォローさせることが得点力アップには必要不可欠である。

第三に評価システムの中で過去のスコアとの増減点を加えているが、増加点はご褒美としてそのまま継続する一方、懲罰的な減少点は見直す必要がありそうである。測定誤差も考慮すると学生のモチベーションアップには繋がりがづらいと思われる。

第四に現状の評価制度ではTOEICのスコアによる落第点を設定していないが、意欲の低い一部の学生の中には受験自体はするものの、試験中の居眠りなど実質的には解答放棄に近い受験態度が見受けられる。今後は単位取得のために必要最低限の下限点を200点程度に設定し、適度な緊張感を与える必要がある。

第五に学生のモチベーションの維持、向上のために彼らのキャリア形成において英語力の必要性を理解させることが必要である。3年時の秋頃からスタートする就職活動でエントリーシートの記入などでTOEICスコアを求められるケースがあり、その時点で英語力の必要性をやっと実感するが、入学して間もない1, 2年生には伝わりづらい。この点においては、キャリア開発室と連携をとり、早い時期からキャリアセミナーの中でも話題の一つに取り上げることが効果的であろう。

本カリキュラムはまだスタートして2年目である。現在進行中であり、まだシステム全体を評価するには時期尚早であるが、学生の英語学習へのモチベーションを維持・向上させるための工夫と仕組みづくりに更に取り組んでいきたい。

引用文献

- 1) TOEIC® Examinee Handbook, p.21
- 2) G-TELPはGeneral Tests of English Language Proficiencyの頭文字をとったもので、実用的な英語の熟達度を測るテスト
- 3) 鹿児島大学英语教育改革報告書（平成20年度—平成21年度前期）